

---

# ツェリの言葉 後編

なず

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツエリの言葉 後編

### 【Nコード】

N7246X

### 【作者名】

なす

### 【あらすじ】

「ツエリの言葉 前編」の続編です。

第三次世界大戦の後に生き残ったのは、少しの人間と自然。わずかに残った人類は、少数の中でも優れた能力を持つ者を”研究者”と名づけた。

あらゆるものを造り出す”研究者”らを、人々は崇め、恐れた。

それから二百年あまりが過ぎ、ある程度の都市が復興したところに、

彼らはの末裔の最後の一人が死んだ。

たった一体のロボットを遺して。

寂しがり屋の”研究者”の青年と、彼のロボットの日常。そしてその終わりを描いた短編。

**(前書き)**

後編です！

初っぱなからシリアスですが、よろしく願います。

ばあん！

店のドアが物凄い勢いよく開いたかと思えば、ツエリがぼろぼろ泣きながら叫んだ。

「おっちゃん、Aが、Aがっ」

「ツエリちゃん！？ 落ち着け、いま行く！ 走るぞ！」

「Aが、Aが」と繰り返すツエリを引きつれて走って店を出た父さんを、ぼくも慌てて追い掛ける。

とにかくAさんに何かあったらしいという事は、ぼくにもわかった。

どうにもならない。医者が首を横にふってから、気を遣うように退室した。

青ざめた顔で横になったAさんは、蚊のなくような声で「ツエリ」と呼んだ。

「ごめん」

「アホ！ なんで……っ、なんで、言わんかったんや！」

ツエリが泣きながら怒鳴ると、Aさんはまた「ごめん」と呟いた。「研究者」特有の持病なんだ、これ。なにかを開発する際に脳を一定以上使つと、寿命が縮まる」

あまり知られてないけどねと笑うAさんは、どこか他人事のように話していた。

「でもツエリ、キミを造つたから死ぬんじゃないよ。確かに頭は使ったけど”致死量”じゃなかった。あれ以降にも造らなければ、六十歳くらいまでは生きられたらうね」

見透かされたツエリは食ってかかる。

「じゃあなんで！」

「机の引き出しの一番下、見て」

父さんが目で促して、ぼくが引き出しを開ける。

中には分厚いアルバムと、これは確か。

「……microSD……？」

「日記だよ。僕の遺書でもある」

答えたAさんに全員の目が向く。

じゃあAさんは、死ぬことを覚悟してこれを造っていたのか？

一体、

「なんの為に、って顔だね。みんな」

クスクス、Aさんは笑う。哀しそうな笑い方だった。

「僕はね、ツエリ。キミに望まない不死を授けた人間だ。

永遠という地獄を渡した僕は、その責任を負わなきゃならない。

僕がいなくなっても、この人間だらけの世の中で数人の、キミとしばらく一緒に生きてくれる人を見つけられるように、何かを残さなきゃならないと思っただんだ」

Aさん以外、誰も口を開かない。

父さんは口を挟もうとせず目をつむっていた。

「思い立って、すぐに造っただ、それ。

ほぼ永久的に壊れないmicroSD。ツエリの”中”にだけ組み込めるようにした。方法はわかるよね。

アルバムは、今まで作ったことがなかったからね。デジカメに入っていたデータを全部印刷して貼るだけだったけど、なかなか楽しかった。朽ちるのを防止する為のケースも引き出しに入ってるから使って」

「今やなくてもええやん！　なんで、今……っ。まだ時間はあったやろ！」

「なかつたんだよ」

Aさんの即答に、ツエリが動揺したのがわかった。

「計算したんだよ、残り時間を。アルバムのケースとmicroSDを開発して、どれだけの寿命が削られるか。」

そしたら、ちようどゼロ」

焦ったけど、間に合ってよかったよ。

そう言うAさんに、ぼくは思わず、言う。

「Aさんは、遣されるツエリのことを考えて、正しいと思ったことをしたんですか」

「そのつもりだよ」

「勝手すぎるよ！ どうしてぼく達に、ツエリに言わなかったんですか！」

「テミク」

うつむいたままのツエリに服の裾を引っ張られて、黙る。視界が涙でジワジワとにじんできく。

悔しい。

なんだか、悔しい。

頼られなかったことが、泣きたくなるほど悔しい。

「…… Aが他を頼らんのは、ウチもよう知つとる。頑固者やもん」

「うん……ごめんな、ツエリ。旦那も、テミクも、ごめん」

「今度来たときは、値段つけてやらねえぞ」

父さんがそう言うのと、キョトンとしてから、それは家計に厳しいなとAさんは笑った。

青い顔だったが、さっきのように哀しそうな笑い方ではなかった。

「旦那、ツエリを頼んでいいか」

「そのうち貰おうと思ってたさ」

「はは。嫁にはまだ早くないか？」

いつものように話しているが、Aさんの声が小さくなってきていることに、時間がないということを思い知る。

「ツエリ、今からいうことはSDに入ってるけど言うから、よく聞

きなさい」

「……うん」

きゅ、と、ぼくの服をつかむツエリの手の力が強まる。その手をぼくは優しく握った。

「人間は騙すし喚くし我が儘だし、キミから見れば、確かに汚い生き物だ。

キミほど清い生き物を、僕は知らない。

けれど、みんながそんな性格じゃないんだ。旦那はどうだった？

テミクはどうだった？ ……僕は、どうだった？

一ヶ所だけを見ないで、世界を見てくれ。

まわりを全て偏見で見下して家に籠もるんじゃないやなくて、すべての認識をゼロにして外に足を運んでみてくれ。

冷たい言葉や鋭い視線だけじゃなくて、野に咲く花々や人々の笑顔をみてくれ。

なんでもいい。

自分から何かきっかけを掴んで、人間を、僕らを好きになっくれ。

そしたら永遠という地獄は、きっと天国になりえるから」

「 遺されたロボットの彼女は、彼の言葉を信じて家の外に行くようになりました。彼女はいま、どこかで幸せに暮らしているですよ」

男性はベンチに座って、そう締め括った。

嘶を聞いていた男の子が、元気よく手をあげて彼に聞く。

「その”A”ってという人の名前のゆらいは、わかったんですか!？」

「うん、わかったけど……なんだったっけか」

「忘れたん？」

男性のとなりに座っている女の子が顔をしかめると、男性は申し訳なさそうに笑った。むう、と怒るタイミングを逃した女の子はうなる。

「今日は教えん！」

「えーっ」

「……明日も来たら教えたる」

「ほんとっ！」

絶対だからねと約束して男の子は駆けていく。それを眺めていた彼女を、男性はクツクツと笑った。

「ほんと、丸くなったねツェリ」

「うるさい」

つんと反らしたツェリの顔は真っ赤で、テミクはまた笑った。ああ、意地っ張りなところは変わっていない。

「帰ろう。父さんが待ってる」

「……ん」

テミクは微笑ましく思いながら手を差しだし、重ねられた手を優しく握った。

Aの最期の言葉を聞いたときと、同じ優しさで。

もう少しで完成する。

完成間近のそれが入ったケース。その前に設置した四台の特製コンピュータを操作しながらそう呟いて、不意に気付く。

「この子の名前、ない」

「やばい、どうしようか。」ロボ”は隣の犬の名前だし”一号”は仮にも女の子に申し訳ない。そう思いつつ、手は止めない。

使い終わった方のコンピュータで、インターネットに繋いでいるいる探そうか。

悩んでいる内に、低く唸るような機械音が響く。

ケースが開き、女の子の形を模した彼女が目覚めます。

「……………う、あ？」

「？……………ああ、言語能力学習設定か」

人間の子供のように、一から学んでいく設定にした。けれど人間とは造りがちがうので、学べば二日ほどで流暢に話せるようになるだろう。

それはともかく名前だ。

「待っててな。わかる？　ここで、待つ」

「ま、っ。STOP？」

……………英語？

「すと……………え、なんで英語……………ああ、機械だから」

これは言葉を教えるのが楽になったぞ。

「STOP？」

「違う違う、ウェイト。Wait、待つ」

「It recognized waiting.（待つことを承認しました）」

「ん。Sit down there.（そこに座って）」

きちんと気を付けをして待つ彼女に、僕の隣のイスを指して言うてからコンピュータに向き直る。彼女は背筋を伸ばしてイスに腰掛けた。

しばらく弄っていると、見覚えのある国名がちらついた。

「……………メイテイル国」

彼女が走っていった先の国だった。

そして、僕がかつて暮らしていた国。

「あ、そうだ」

ふと思い出して検索をかける。”メイテイル国 神話”。

ひっかかった内のひとつを開いて、一番上にでていた名前は”ツエリコント＝タクアニア”。慈愛の女神。

いいじゃないか。

「ツエリ」

「？」

「Your Name・ツエリ」

「つぁ、んー……。ツエ、リ？」

「そう、ツエリ。The goddess of affecti  
on. (慈愛の女神)」

照れたように笑うツエリ。しかしふと思い出したかのような顔を  
して僕を見た。

「What Your Name? (あなたの名前は?)」  
「……」

はてさてどうしようか。自分の名前などとつくに忘却の彼方だ。  
しばらく考えて、思い出すよりも簡単な方法を思いついた。

「Please consider my name. (あなたが  
僕の名前を考えてください)」

ツエリが息を飲み、目を見開く。

「Wish. (お願い)」  
名前がなければ互いに困るだろう。けれどせっかくだし自分に名  
前をつけるより、ツエリにつけて貰おうと思ったのだ。

二、三分考えこんだ後、ツエリは小さく呟いた。

「  
A<sup>ア</sup>」

「ア。A？」

「What is the origin? (由来はなに?)」  
聞けば、ツエリは初めて笑って答えた。

「Because I am the person whom  
et "first." (私が"初めて"会った人だから)」  
「初めて"会った人だから、A。はじめの文字。」

「……うん。」

「いいじゃないか。」

「Thank You, ツエリ。Today to me am

A.(今日から僕はAだ)「

「Thank You、A。Today to me am ツエリ」

これからよろしく、ツエリ。

これからよろしく、僕の名前。

”A”という何よりも単純な一文字は、慈愛の女神ツエリの言葉によつて何よりも大切なものになった。

「ツエリ、Thank Youは、ありがとう。ありがとう  
「う」

「あ、あー、いが、と」

「はは、そうそう。ありがとう」

「あいあと」

「ありがとう」

「んん……あー、りー、がーおう」

「お、近い」

きつと今日のごとはたくさんデータに埋もれて、すぐに忘れてしまっだろう。

けれど、ふとした拍子に思い出して、なにかの支えになるだろう。

「ありがとう」

「Correct answer! (正解)」

「ありがとう!」

だから今は、ツエリの言葉を。

彼女と過ごした時間のように、大切に。

(後書き)

ど、どうでしたか？ (びくびく)

この話のこの終わり方は個人的に納得がいていないので、そのうち番外編も書こうと思っています。

読んでいただいておりますありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7246x/>

---

ツェリの言葉 後編

2011年10月19日08時08分発行